

郷土博 通信

No.8

2016 秋



「檜笠餘韻」部分 (解説 10 頁)



CONTENTS

| | | | |
|-----------------|-----|---------------|-----|
| ■ 「檜笠餘韻」部分 | 1 | ■ 中国製塩の素描 | 6~9 |
| ■ 展示室紹介 | 2~4 | ■ 「檜笠餘韻」について | 10 |
| ■ 和綴じノートづくり体験講座 | 5 | ■ INFORMATION | 10 |



第1展示室

— 西讃の経塚—館蔵資料から—

今回の展示では、香川県西部地域の古代から近世の経塚関係資料を取り上げています。これらは発掘調査、または偶然の機会に収集され、寄贈されたもので、いずれも昭和初期以来の館蔵品です。なかには研究の進展によって見直す資料もあり、展示中の船積寺跡^{せんしやくじ}経塚出土のU字形に折れ曲がった太刀(図①)は、その一例です。

船積寺跡経塚は、三豊市の庄内半島北側、瀬戸内海を見下ろす斜面に立地する遺跡です。大正14年(1925)9月、土取りの際に経紙断簡、経軸片、鏡、土器片等が発見され、翌15年1月に鎌田共済会調査部主事(博物館兼務)岡田唯吉等が発掘調査を実施その際、鏡、青白磁の合子、玉類、経箱破片、鉄刀、古銭、土器片等が出土しました。この経塚の築造時期は、平安後期と考えられています。当館では出土遺物の



▲図① 太刀 三豊市詫間町 船積寺跡経塚出土
刀身長630×刀身幅28×棟幅2.4mm

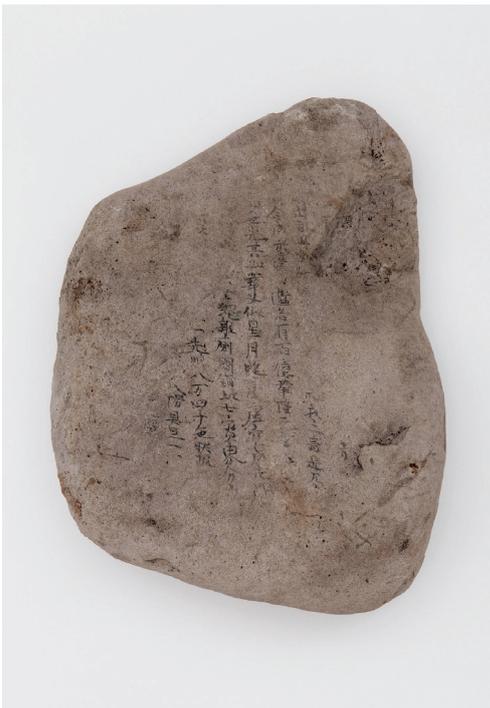
内、土器片や刀類を収蔵しており、前述の太刀は大正15年の発掘調査時に出土したものです。

では、太刀はどのような形で埋納されていたのでしょうか。調査当時の図面によると、短刀を並べ、その上にこの刀をのせ、板石を両側に立て、天井石を置いていたようです。出土状況で見ると、折り曲げられた状態で埋納された刀であることがわかります。経塚における同様の太刀の例は、香川県^{こうしきざん}香色山1号経塚、兵庫県江ノ上1号経塚、岡山県小山経塚、広島県宮地川経塚、静岡県小国神社経塚、堂ヶ谷1号経塚の6か所と、出土地不明の奈良国立博物館所蔵の1例が知られており、90年

前の発掘資料ではあるものの、船積寺跡経塚も新たな事例として加えることができます。そして、類例の集積の結果、近年の研究では、この太刀を折り曲げて副納する行為が経筒を埋納するにあたっての何らかの意味を持つ儀礼であったと考えられています。

本展では、このほかに銅製経筒、瓦経、観無量寿経が書写された経石(図②)、また、資料の拓本、写真等を展示することで、西讃地域経塚の諸相の一端をご紹介します。

(廣瀬 永津子)



▲図② 経石 丸亀市飯山町
縦316×横242mm

第2展示室

— 久米通賢と天文学 —

古代から江戸時代までの日本の天文学は、天文占いをすること、暦をつくることを目的としていました。これには古代中国の思想が大きく影響しています。太陽や月、星の位置や動きは、天の意思を反映したものと信じられていました。為政者は天文観測することにより天の意思を読み取り、国の行く末を占い、暦で農作業や生活の節目を示すものであると当時の人々は考えていたのです。

江戸時代までの暦は太陰太陽暦たいいんたいようれきです。太陽と月の動きを組み合わせることによって作られる暦であるため、その動きを詳しく知る必要があります。江戸時代は主に天体の位置・距離・運行や日食・月食の観測をしていました。地球上の位置関係を定めるため緯度・経度の測定を必要とする測量とも深い関わりがありました。

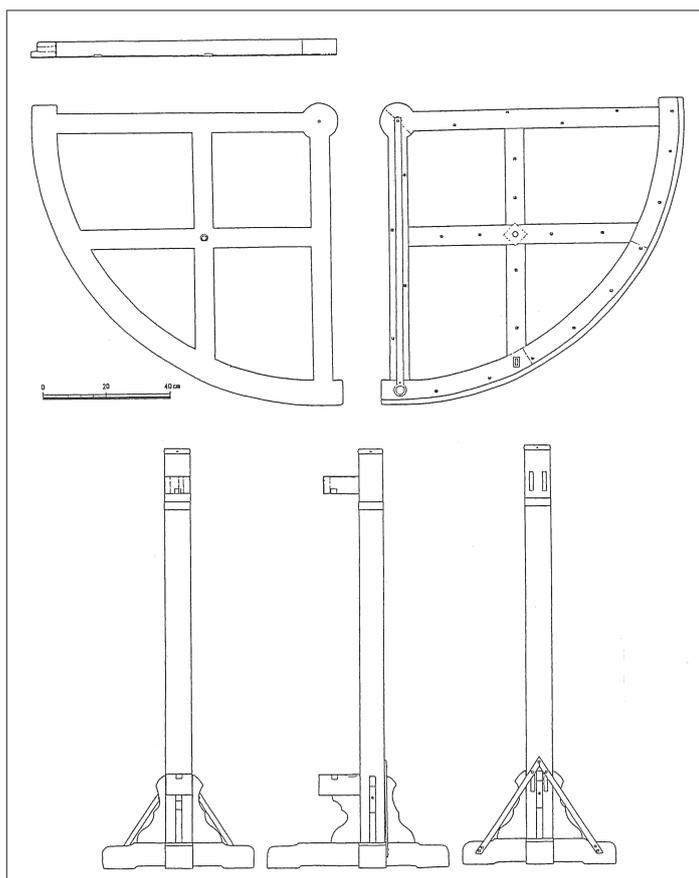
久米通賢は19歳のときに大阪の天文学者、問重富はざましげとみのもとへ弟子入りしました。問は初めて西洋天文学を導入してつくられた寛政の改暦の中心人物の一人であり、観測機器の開発にも力を注いでいました。久米は当時、最先端の知識と技術を持った問のもとで、最新の天文暦学てんもんれきがくや観測・測量技術を学んだものと思われま

す。久米は家督を継ぐために讃岐に戻った後も天体観測を続けています。観測に必要な機器は独自のアイデアを加え、自分で製作していたようです。「ヲクタントフ」(航海用の天体高度測定器)や「象限儀」(天体の高度測定器)には「バーニア副尺」が使われていますが、その原理を理解して測量機器に応用したのは、おそらく久米が日本で初めてではないかと推測されています。

久米は人々の生活に役立つ業績を数多く残しています。その礎は若い頃に学んだ天文暦学でした。自作した測量機器類に見られる独自性と手先の器用さは、銃砲類などの開発へとつながっていきます。また測量技術や天文計算で培われた計算力は、高松藩領の地図作成や塩田開発に発展していきました。

今回の展示では先述の「ヲクタントフ」「象限儀」に加え、「星眼鏡」(天体望遠鏡)・「天球儀」のほか、観測記録や天文に関する計算をした資料の中から、文化5年(1808)におきた日食に関する記録を紹介します。

(宮武 尚美)



▲象限儀 実測図(S=1/20)
象限盤 半径90.2 厚4.9cm
架台 高133.5×幅47.7×奥行57.0cm



第3展示室

— 描かれた人びと —

日本の絵画は、花鳥画、山水画(風景画)、人物画、浮世絵などに分類されます。

そのうち人物画は、人間の描写に重点を置いたもので、その題材や内容によって、肖像画、風俗画、美人画、宗教画、歴史画などきわめて広範にわたります。

わが国の絵画の歴史は、弥生時代に祭祀用具として使われた銅鐸に、人物、鹿や猪、鳥や魚、建物などが表現されたのが始まりとされていますが、江戸時代に讃岐国で出土したと伝えられる袈け裟さ禪ぜん文もん銅どう鐸たく(国宝・東京国立博物館蔵)には、鹿を射る人、糸を紡ぐ人、竪杵で臼をつく人などが突線つとせんで表されています。また、飛鳥時代の高松塚古墳の壁画には、16人の男女群像が色彩豊かに描かれており、当時の宮廷の風俗を反映したものと考えられています。

鎌倉時代になると、貴族の間で肖像画が隆盛し、また宮廷や寺社などでは、大量の絵巻も制作されるようになり、そこにさまざまな人物も描かれます。

そして、江戸時代になると、人びとを生き生きと描く風俗画が盛んになり、さらにそれをきっかけとして浮世絵が登場します。評判の美人や、時のファッションの最先端である役者の肖像画が版行され、大人気となりました。

明治時代以降には、画家たちは西洋画の遠近法や陰影を取り入れた写実的な表現により、さまざまな人物画を生み出してきました。

今回の展示では、画家たちが、さまざまに人びとを描いた人物画、何気ない日常のありとあらゆる人びとの姿が絵画化された『北斎漫画』(文化11年～明治11年刊・1814～1878)、800人余りの行列する人びとが描かれた『文久行幸記』(文久3年刊・1863)等の版本などをご紹介します。また、あわせて伝讃岐出土の袈裟禪文銅鐸の拓本も展示します。

画家(絵師)ならではの観察眼や、憧れや想いを託して描かれた人びとの姿はそれぞれに個性的で魅力的です。どうぞお楽しみください。

(吉久 由紀子)



▲袈裟禪文銅鐸(伝讃岐出土)拓本 部分



▲『北斎漫画 八編』葛飾北斎画



▲「岩清尾八幡宮祭典図」尾崎秀南筆

和綴じノートづくり体験講座

和綴じノートづくり体験講座を終えて

平田正和

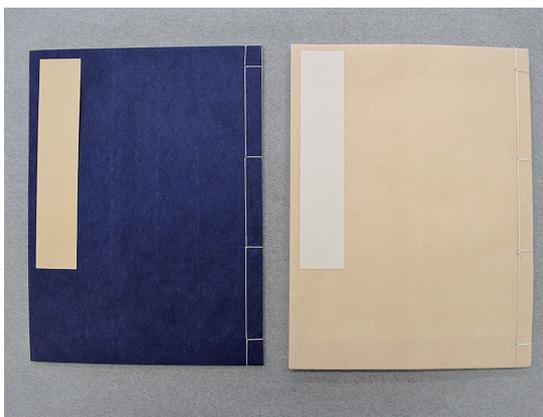
「なぜ紙資料に関するワークショップを開催しているか?」と聞かれる事が多いのですが、答えとしては、紙資料に触れる機会を作り資料の取り扱いや保存方法・環境整備等を、ワークショップを通して広め、地域の文化等に興味を持って頂き、継承していく機会を作ることが挙げられます。

古文書を読む会など地域資料に関心のある方は大勢いらっしゃいますが、特に若い世代(小・中学生)にも地域資料の存在を知ってもらい、「貴重な資料がわが町にはある」と関心を持ってもらいたいと思っております。それが資料保存の第一歩になります。

我々は資料修復の仕事をしております。修復は、資料保存の最終段階の行動です。それまでにできることを多くの方々を知って頂き、活用してもらえると、資料自体の価値観(意識)を変える場を作りたくこのような活動をしております。

ご参加頂いた皆様、博物館スタッフの皆様、ありがとうございました!

(株式会社 工房レストア 代表取締役社長)



▲完成見本



▲体験講座風景(平成28年7月30日)

— 体験講座レポート —

今回は、「文化資料の町医者」平田正和氏を講師にお招きして、日本に古くから伝わる「和綴じ」製本を実際に自分で体験してみようという講座でした。

小学生から大人まで幅広い年代層の22人のみなさまが参加され、5つのグループに分かれて、和やかな雰囲気の中での体験講座になりました。

和綴じ本の本紙に用いたのは5種類の和紙。雁皮紙2枚、画仙紙2枚、手漉き宇陀紙4枚、機械漉き楮生成紙4枚、機械漉き楮漂白紙4枚の合計16枚。それを二つ折にして、各自で作った紙縫りで仮綴じし、それを表紙で上下にはさみ、絹糸を使って、和本のもっとも一般的な「四ツ穴綴じ」で綴じました。表紙にタイトルを記す題箋を糊付けして完成! 手際よく早々と作り上げた方たちは他の方のサポートにも回って、参加者全員、予定時間内に無事完成し、それぞれの作品を手元に記念写真に納まりました。

(齊藤 祐司)



中国製塩の素描

大島 立子

【はじめに】

讃岐の技術革新家である久米通賢の功績の一つは入浜式を改良した坂出塩田開発であった。中国では、早くより塩が王朝や地方政権を支える財源になっていたためか、塩の生産方法について書かれた資料が多く残っているが*1、それらを検討すると入浜式塩田と思える記述も見られ、大規模な塩田建設もある。中国技術史について研究をしてこなかった私には日中の塩田を比較することはできないが、その材料となれば幸いと考え、ここに宋代から明代に行われた製塩工程を紹介したい*2。なお宋一明700年の間、製塩方法は大きく変わっていないので、時代を特に示さないで述べる。

【製塩の工程】

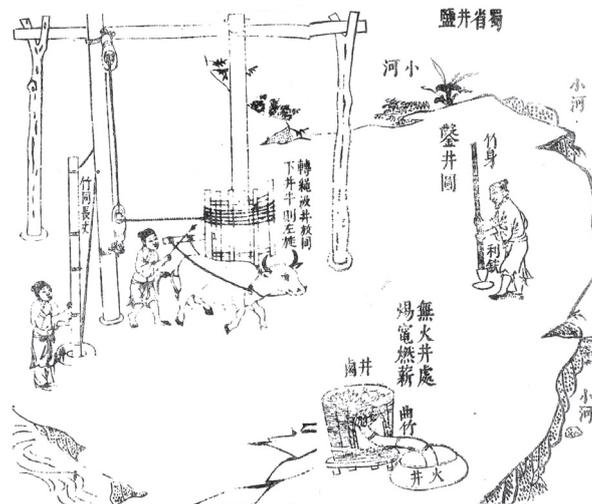
近世の中国では、塩の種類を海塩・池塩・井塩・土塩・砂石塩・崖を掘って取り出す崖塩（いわゆる岩塩）の六つに分類をしていた。主なる産地は、海塩が沿岸地方のほか、池塩・土塩・砂石塩は山西地方、井塩は四川地方、崖塩は甘粛・陝西地方などである。

採取方法は水からの採出と、土からの採出とに大別され、製塩は天日法と煎煮法せんしゆの二種に分類される。製法工程が少ないものからみてゆく。

崖塩は、崖を掘っただけで、精製作業はなかったらしい。

土塩は、塩を含む土や砂を集め、塩分を含む池にいれ鹹水かんすいにするか、集めた土に水をかけて、鹹水をつくるかして、それを煮詰め、結晶にした。

井塩は、塩分を含む井戸から採出する。井戸の口は人も入れるほどの大きいものから、図1に見



▲図1『天工開物』巻5 右から、井戸掘り、精製、汲み上げを示す

*1 宋代には『太平寰宇記』、『政和經史證類備用本草』があり、明代には技術書『天工開物』のほか多くの塩政史・塩業史が出版された。元代に書かれた『熬波圖』は施設や工程を図とともに説明している。本書については注2吉田著で、翻訳・解説をしている。

*2 基本的な研究書としては、佐藤武敏『中国古代工業史の研究』（吉川弘文館、1962年）、吉田寅『元代製塩技術資料『熬波図』の研究』（汲古書院、1983年）、河上光一『宋代塩業史の基礎研究』（吉川弘文館、1992年）、佐伯富『中国塩政史』（法律文化社1987年）であり、本稿はこれら先学の研究を参考したものである。



るように、取り出すための袋（牛の皮）や桶が入るだけの小さいものがあり、汲み上げには人力や牛力が使われた。宋代中期に、太い竹をつなげ、そのなかに下に弁を付けた細い竹をいれ、塩水を吸い上げる方法（卓筒という）も考案された。汲み上げられた塩水は煮詰められた。塩水が泉のようにわき出ているところもあったという。

池塩は、池のそばに段々畑のように塩田を作り、塩田の畦は滑らかにする。池との間には堰を作り、上から濁りのない塩水を流し、最下段の畦に、結晶を集め、採取する（図2）。毎年春先に塩田の畦



▲図2『政和經史證類備用本草』解塩の塩田作業(上部波形は池)

を整備し、堰を開き塩水を流入し、春から秋のはじめにかけて日光と南風によって水分を蒸発させ、塩を結晶させる。天日法であるため、煎煮法による海塩に比べ、塩の結晶があらく、古くから顆塩といわれていた。自然まかせのため、秋から冬には製塩の作業は行われなかった。

海塩は主要な産地では、多くは塩田を作っていたが、ほかに波に打ち寄せられた海藻を焼き煮詰める蓬塩といわれるもの（日本で言う藻塩焼きか）、井戸を掘り海水を汲み上げるものもあった。製塩については、天日法・鹹水を煮詰める煎煮法ともに見られる。明代（17世紀）の技術書『天工開物』に、①高い堤があるところに塩田を作り、撒かれた砂や灰に朝に塩を含んだ露が付着し、それを集めるもの、②海浜に塩田を作り、自然の潮の満ち干にゆだねるもの、③常に潮がかぶるところに穴をほり、その上に竹・木をかけ、むしろで覆い、さらに砂を敷き、塩水が下の穴に落ちるようにするもの、三方法が紹介されている。いずれも鹹水を煮て塩にするとある。第一のものは、毛細管現象を利用してあがってきた露であれば、入り浜式と考えられる。第二・第三のものは海水の導入を自然に任せたものである。この三種類の塩田、それ以外の塩田を作らない方法にしても、製法の相違は、地域による技術の高低によることが大きいですが、それだけでなく、地勢・塩の販売範囲などの自然・社会条件にもよっていた。

中国近世の具体的な塩田建設の資料から、『天工開物』のように入り浜式ではないかと思える表現を私は見つけられなかった。それでは塩田の構造は日本のものとの程度類似しているであろうか。それを知る一助として海塩の塩田開墾作業の工程を次に紹介する。

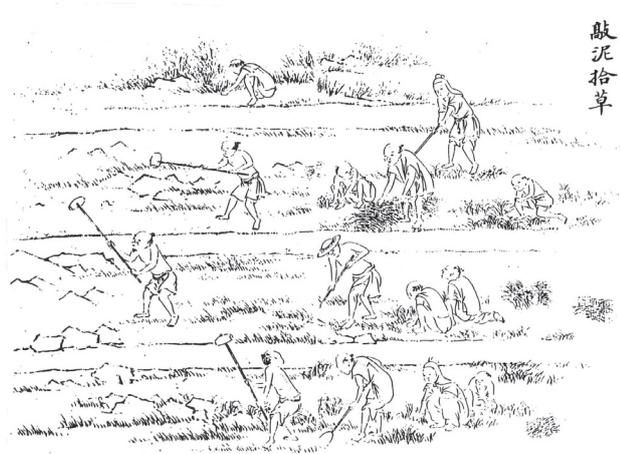
**【海塩の塩田開墾と設備】**

満潮になっても、塩田が沈まないように、海岸に防波堤を造る。塩田まで海水を引き入れる水路が掘られ、水路には堰を設け、流入する海水の量を調節した。海潮の状況を観察する人を常におき、堰の開閉を行った。この水路は、塩田から鹹水を煎塩場に運搬する時にも利用された。

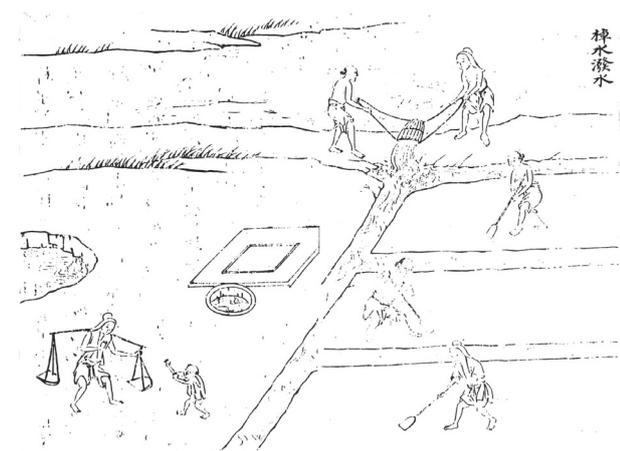
塩田開墾は、土地を掘り起こし、徹底的に除草することから始まる(図3)。その後、人や牛を使い、塩田を平らで滑らかにする。塩田には海水を入れ、常に潤った状態にしておく。塩田は区分けされており、その周囲には海水を導入するための溝が作られ、水路から海水が入るようにする(図4)。煎煮法の場合には、塩田のそばに塩分を含んだ砂や灰を集積する場所(灰淋・滷池などという)と、そこにできた鹹水を入れる日本でいう沼井(滷井という)が作られた。ともに底は平らにした上、さらに牛によって踏み固められた土を敷きつめ(図5)、塩水が下にしみ出ることを防いだ。

【鹹水の生成と濃度測定】

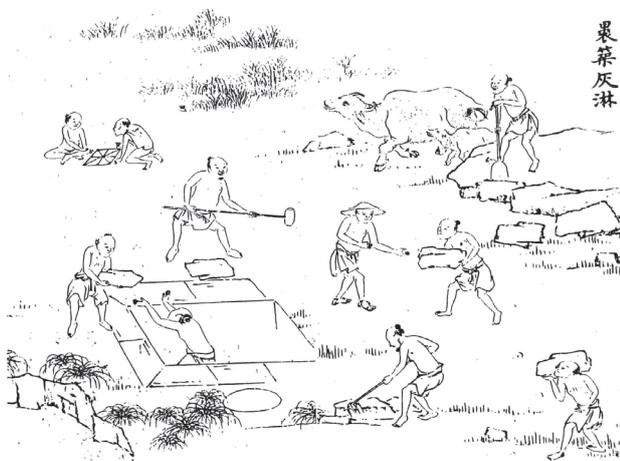
塩分を含んだ砂などをさらった後は、海水で塩田を潤しておく。翌日の天気晴れであることを確認してから、灰や砂を塩田にまき、平らにしておき、翌朝、塩田の周囲の溝から海水を人力で散布し、灰や砂にしみこませ、塩を付着させる。灰や砂が乾くと、灰淋に集め、その上から海水を流す。この海水は、



▲図3『熬波圖』塩田開墾(除草)



▲図4『熬波圖』塩田の畦と溝



▲図5『熬波圖』右上で作られた踏みしめられた土を灰淋・沼井に運ぶ



樋を伝って、横にある沼井に流れでる(図6)。この作業を何回か繰り返し、沼井の塩水を濃縮させる。鹹水の濃度は、竹・乾燥した蓮の実・蓮の実を詰めた竹筒・桃の仁・鶏骨などを鹹水に浮かべて調べる。竹筒に入れた鹹水に蓮の実を入れ、測ることもある。

鹹水が規定の濃度に達すると、煮詰める。竈は煉瓦でつくられ(図7)、煎煮用の盤は鉄や竹でつくられた。鉄盤の形は、四角では裂けやすいため丸形がよいが、丸形だけでも支障があり、その折衷として、丸形に羽をつけたものが考案された(図8)。

【おわりに】

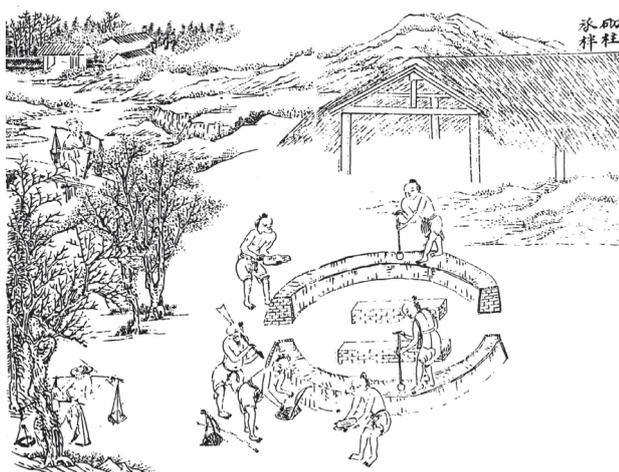
見てきた中国の塩田は、塩田開墾・防波堤の建設・海水を導入する水路の掘削など、強い指導力がなければ造ることができないし、防波堤や水路などを維持することも難しい。中国では宋代以降、政府が塩を管理したので、大規模の塩田も各地に広まることのできたと考えられる。これらの塩田には周囲に海水を入れる溝を作ること多く、入り浜式の原理が働いていたとも考えられる。なお日本では古くから入り浜式が伊勢神宮で行われたといわれているが、広まったのが江戸時代であるのは、技術面からと言うよりも塩をとりまく政治・社会の相違からではないかと、思われる。

(公益財団法人 東洋文庫 研究員)



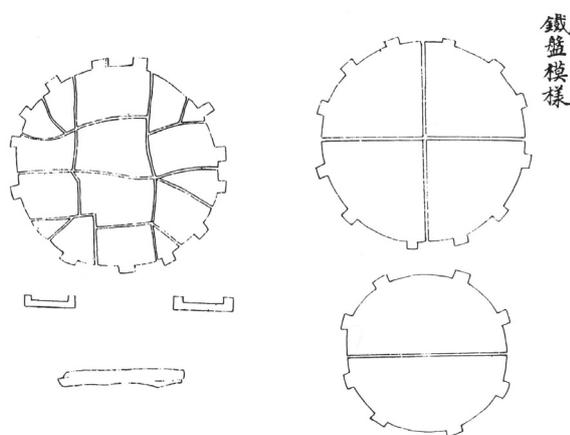
擔灰入淋

▲図6『熬波圖』濃縮水の採出



承印 梓柱

▲図7『熬波圖』竈



鐵盤模樣

▲図8『熬波圖』盤の型



『檜笠餘韻』について

(表紙解説)



▲「檜笠餘韻」
縦121.4×横57.1cm

松尾芭蕉の門人36人の肖像と発句が描かれた本紙の上部には、
＜檜笠餘韻 擬南湖所模 蕪村本図 筆意＞と記されています。

画題にある南湖は、江戸時代中期から後期にかけて活躍した江戸生まれの文人画家春木南湖(宝暦9年～天保10年・1759～1839)と思われます。伊勢長島藩主増山正賢(号雪斎)に仕え、その命により京阪・長崎に遊学し、書画を木

村兼葭堂や、清人費晴湖に学びました。俳諧・狂歌も能くしたといえます。また、元禄2年(1689)に芭蕉が、「奥の細道」の旅を大垣で結んだのち、領内の大智院に投宿。その100年後を記念した偲ぶ会を、藩主や十時梅厓らとともに同院で催しています。

「檜笠餘韻」としたのは、蕪村の俳諧撰集「花鳥篇」に収載されている「檜笠辞」に倣ったのか、また、「蕪村本図」とあるのは、蕪村筆の『蕉門三十六俳仙図』を模したということなのか、それとも蕪村が描いた画を元に版行された『俳諧三十六歌僊』(寛政11年刊・1799)を参考にしたものなのか……あれこれと想像がふくらみます。

松尾芭蕉(正保元年～元禄7年・1644～1694)と与謝蕪村(享保元年～天明3年・1716～1783)は江戸時代を代表する俳人。しかも蕪村はつねに芭蕉に憧れ、心の師として仰いだといえます。南湖もまた芭蕉を慕い、蕪村を尊敬し目標としていたのでしょうか。

(吉久 由紀子)

INFORMATION

■ 連載「郷土博物館のあゆみ」について

「郷土博通信」第7号までの6回にわたって連載してきました「郷土博物館のあゆみ」は、博物館が開館し、物産展示の展開に至るまでを描いたところで一旦筆を置くことといたします。

今後、激動の昭和に入っの郷土博物館のあゆみを巡る資料が整いましたところで、再び掲載して参りたいと考えています。(学芸・あゆみ班)

■ 助成事業について

当財団は人材の育成・教育の普及・学術文化の向上および社会福祉の充実に寄与する地域の団体または個人に財政的援助を行っています。随時募集していますので、ご希望の方は当会に助成金申請書を請求し、必要事項を記入し提出して下さい。助成の可否および金額は、事業の規模・内容を考慮して理事会で決定します。

詳しくは、公益財団法人 鎌田共済会 事務局
(電話 0877-45-0033) までお問い合わせ下さい。

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分
岡山から…快速マリンライナーで約40分
JR予讃線坂出駅から徒歩5分
※駐車場あり

開館時間：午前9時30分～午後4時30分 (入館は4時まで)

休館日：月曜日 / 祝祭日

夏季特別 (8月13日～15日)

年末年始 (12月29日～1月4日)

入館料：無料



- ①夜もすから 秋風きくや うらのやま 曾良
- ②来年は 来年はとて 暮にけり 露川
- ③目利して わるひやととる 月夜かな 如行
- ④おもふ事 たまつて居るか ひきかえる 曲翠
- ⑤蒲団きて ねたる姿や 東山 嵐雪
- ⑥年よれば 声もかるそ きりきりす 智月
- ⑦鶯の 身を逆に はつね哉 其角
- ⑧霜の朝 せむたんのみの 盈れけり 杜国
- ⑨行年や 親に白髪を かくしけり 越人